

どうなる、どうする「令和の管理栄養士」

国立がん研究センター東病院
栄養管理室長
千歳はるか

つい先日、新元号「令和」が決定した。このタイミングに便乗しようと思う。ちなみに私は昭和生まれである。そして管理栄養士としては平成に産声をあげた。そのころの管理栄養士はまだ給食業務が主であり、今では当然のように存在している保温保冷配膳車も「適時適温」のために整備されはじめた時代であった。臨床における管理栄養士は平成の時代に大きく変化した。地下（栄養部門、調理室は地下が多い）から出て栄養指導をしなさいと言われだし、指導記録を書くためにSOAPを覚えた。褥瘡管理がなされていないと減算されるという時期があり院内がざわついたことを覚えている。そして褥瘡管理の充実がチーム医療の推進にもつながり褥瘡チームやNSTが立ち上げられた。NSTといえは栄養サポートチームと今では認知されていると思うが、当初は妊婦健診で受けるノンストレステストや新潟総合テレビ（NST）と冗談なのか本気なのか医師から言われたものである。それでもこのNSTのおかげで医師をはじめとする医療者との距離がグッと近くなった。しかし栄養士の業務のイメージはまだまだ給食にあるかもしれない。実際、多くの医療機関で食事を提供するにあたり給食委託会社に委託しているであろうがその管理責任は病院栄養士にある。どんなにチーム医療が定着し管理栄養士が病棟へ進出しても安全でおいしい食事提供から離れてしまうことはできない。食事は管理栄養士にとって大事な武器でもある。当院はがん専門病院であり、化学療法や放射線療法、その他がん治療による有害事象に対する食事調整、食事指導を実施している。「食べる栄養管理」が重要視されている。患者さんも「食べられる＝生きる」と感じている方も多い。少しでも食べられることを維持するため個別対応が多く、補

助食品等も多く備えている。正直、在庫管理が大変である。給食といえば非常災害時や食中毒に関する危機管理もできていて当たり前と思われる。災害が多かった平成は非常時の対応を真剣に考えさせられた。また、患者食の発注、検収にまだ携わっている病院管理栄養士も少なくないはずだ。

私はもっともっと管理栄養士について知っていただきたいと感じている。近頃はテレビの健康番組で管理栄養士が美しく華やかに出演している姿を目にすることも多くなった。以前よりは注目してもらえる存在になったのだと思う。しかしながら栄養士と管理栄養士の違いが正しくわかる人がどれだけいるだろうか。医療者でも多くないのでは…。怖いので改めて聞く勇気はない。

医療の一員として受け入れていただいていることは有難く思う。しかし管理栄養士として医療の現場でその専門性を発揮できているだろうか。発揮できていないとは思っていない。けれど明確に示すことは今のところできていない。管理栄養士による実績の蓄積とエビデンスの創出が喫緊の課題と叫ばれている。私はそのエビデンスの創出のためにこそ平成の管理栄養士が踏み込んだチーム医療が活きると思う。まずは医師やさまざまな医療スタッフの協力を得ながら臆せず臨床研究にも挑み、実績を示し、早いうちに専門性を評価され主体的に動ける医療職にならなければならないと思う。働き方改革とともにスタートする「令和の管理栄養士」は効率化も課題である。IT、AIも味方にしたいが業務を奪われてしまっただけは困る。私自身も期待される役割を果たせる「令和の管理栄養士」にモデルチェンジしなければ…。

さて、令和の管理栄養士による「医療」への投稿が増えるか否か…。いやいや、「増やすぞ!」ですね。